

熊本地域サトウキビの夏植え栽培・秋植え栽培は春植え栽培より多収

無霜地帯における夏植え栽培・秋植え栽培の原料茎重は、春植え栽培に比べて多く、早期収穫に適する栽培型である。

背景・目的

- ・サトウキビ農家戸数の減少により、作付面積は減少するも、一戸当たりの経営規模は拡大
- ・熊本地域では、早期水稲やサツマイモとの作業競合が少ない夏植え栽培・秋植え栽培を推進
- ・夏植え栽培・秋植え栽培における生育、収量、品質等の特性把握が必要

成果の内容

- 夏植え(8月植え)栽培・秋植え(10月植え)栽培において、「はるのおうぎ」は、「農林8号」に比べて原料茎重、可製糖量が多い(図1)
- 夏植え栽培・秋植え栽培は、春植え栽培に比べて10月中旬時の圃場ブリックスが高く、早期収穫に適する(図1)
- 「はるのおうぎ」の秋植え(10月植え)無マルチ栽培の原料茎重は、マルチ栽培に比べて少ないものの、「農林8号」のマルチ栽培に比べると多い(図2)

期待される効果

○サトウキビ生産安定

夏植え栽培・秋植え栽培の植付時期は、収穫時期と重ならず、他の品目との作業競合も少ないため、サトウキビの新植面積を確保

○サトウキビ生産量の底上げ

既存品種の一部を転換し、生産量増加によるサトウキビ生産の維持・向上を実現

○普及対象・範囲

熊本地域無霜地帯のサトウキビ生産者

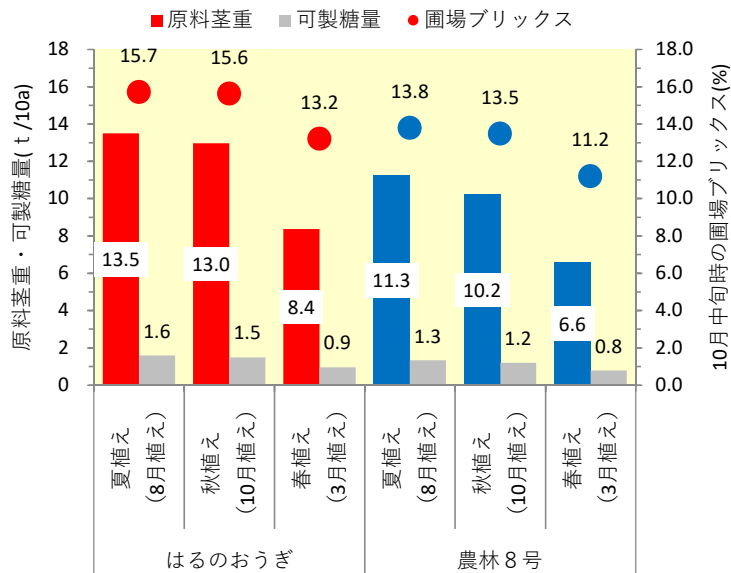


図1 栽培型別原料茎重・可製糖量・圃場ブリックス

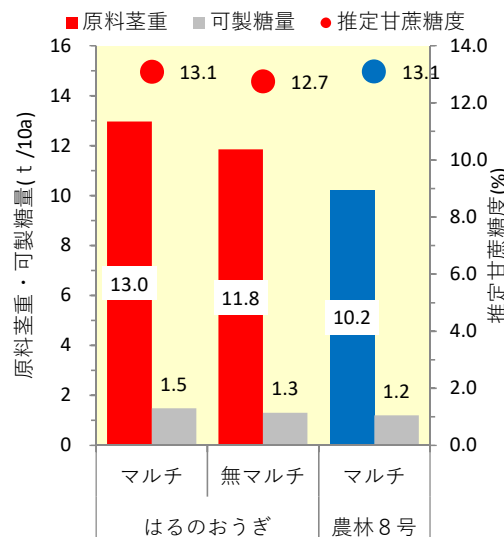


図2 秋植え無マルチ栽培の原料茎重・可製糖量・推定甘蔗糖度

鹿児島県農業開発総合センター
熊本支場作物研究室

(民間委託)